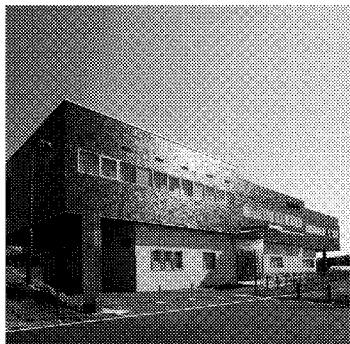


分科会①



大学発ベンチャーの設立に一時の勢いがなくなったと言われている。日本経済が閉塞状態に陥り、先行不安から守りの姿勢になりがちだからだろう。そうした中で新ビジネスに果敢に挑戦する10社が「魅力あるビジネス」を競い合った。

インキュベーションの入居起業家から、事業化のヒントを



慶應藤沢イノベーションビレッジ

創業5年以内の大学発ベンチャー10社が競うビジネスコンテストは、前日の2月15日から始まった。この日の朝、各地から集まった発表者が宿泊している東京・品川のホテルに集合、バスで藤沢を目指した。目的地は「慶應藤沢イノベーションビレッジ」。中小機構が慶応義塾大学、神奈川県、藤沢市と連携して運営しているインキュベーション施設だ。

約1時間半で到着。一行は施設を見学した後、入居する先輩ベンチャー（㈱ユーザーローカル」と「㈱音力発電」の事業説明を受けた。聞く側は事業化のノウハウを吸収しようと真剣そのもの。意見交換では技術的な質問から今後の事業展開まで活発なやりとりが出発ギリギリまで続いた。

ブラッシュアップアドバイザーから叱咤激励

次に向かったのは「事前ブラッシュアップ」を行う東京・虎ノ門の中小機構。明日の本番では、自分たちのビジネスの魅力を5分で説明しなければならない。ブラッシュアップはアドバイザーの前で本番と同じプレゼンテーションを行い、発信力を磨く貴重な場だ。2班に分かれ同時進行。アドバイザーは本番の審査委員

長も務める松田 修一 早稲田大学ビジネススクール教授ら8人。コンテストの審査ポイントは「事業の内容」「新規性」「市場性」「実現性」「成長性」の5つ。これを5分で要領よく話すのは容易ではない。懸命に説明するが、ほとんどが大幅に時間超過。アドバイザーからは「技術は理解できたが、事業の優位性が伝わってこない」「採算についての説明が不足」など厳しい指摘が飛び。単にプレゼンのための注意ではない。今後ベンチャーとして成功するための大切なアドバイスでもある。こうして初日は終わった。

寝る間を惜しんで挑んだ、プレゼンテーション

2月16日、本番。150人は入る広い会場を観客が埋め尽くした。この中には金融関係者も多い。支援者や新しい人脈が作れるかも知れない。

壇上に立つ発表者の緊張が伝わってくる。だが発表が始まると、前日とは違って変わってうまくなっている。寝る間を惜しんで練習したようだ。指摘を生かし要点も絞り込んできた。審査委員の質問に戸惑う場面もあったが、発表後は一様にホッとした表情が浮かぶ。

結果発表は「ベンチャー SPIRITS」の参加者が一堂に会



タイムスケジュール

2010年12月28日(火)

応募条件

- ・創業5年以内(創業予定含む)
- ・大学・大学院等における研究成果を活用
- ・プレゼン者45歳未満

2011年2月15日(火)

事前ブラッシュアップ 前日

- 翌日の本番に備えて下記を実施
- ・中小機構のインキュベーション施設\* 訪問及び発表者の交流
- ・短時間での効果的なプレゼン方法の指導
- ・事業内容のブラッシュアップ

\*慶應藤沢イノベーションビレッジ

2011年2月16日(水)

発表当日 当日

- ・発表時間は1社5分(+質問4分)
- ・審査委員の審査により、グランプリ1社、準グランプリ1社、来場の皆様によるベストプレゼン賞を決定

プレゼンテーション参加企業

アイエムセップ㈱	辻村 浩行 氏
㈱アジアパシフィックフーズ	入海 健氏
エウレカ・ラボ㈱ 富士研究所	村上 裕美子 氏
準グランプリ グローイングジャパン㈱	伊藤 文 氏
GreenLordMotors Kyoto	澤木 陽太郎 氏
ベストプレゼン賞 ㈱スプレーアートEXIN	橋口 論 氏
グランプリ ㈱旅のお手伝い楽楽	佐野 恵一 氏
㈱This is Japan	多田 款 氏
東京農工大学MOT	中山 政行 氏
㈱リアルグローブ	大畑 貴弘 氏

審査委員

審査委員長 早稲田大学ビジネススクール 教授	松田 修一 氏
審査委員	
ダイヤル・サービス㈱	代表取締役社長 今野 由梨 氏
日本ベンチャーキャピタル協会	会長 呉 雅俊 氏
レオス・キャピタルワークス㈱	取締役 CIO 藤野 英人 氏
㈱イノベーション研究所	代表取締役社長 西岡 郁夫 氏
アンジェスMG㈱	取締役・創業者 森下 竜一 氏
㈱中小企業基盤整備機構	新事業支援部長 大矢 芳樹

した「ビジネスラウンジ」の中で行われた。至る所で歓談の輪ができていく。司会者が「結果を発表します」とコールすると視線は表彰台に集まった。

グランプリの発表で、会場の興奮は最高潮に

まずは「ベストプレゼン賞」。これは前もってコンテストの来場者にアナライザーが配られ、プレゼンが分りやすいかどうかを投票で決めるものだ。「スプレーアートEXIN」です。社名が告げられると大きな拍手と歓声が上がった。



ベストプレゼン賞 ㈱スプレーアートEXIN 橋口 論 氏

続いて準グランプリ。これには廃食油の混合燃料でコストとCO2削減を実現した「グローイングジャパン」が選ばれた。トロフィーを授与された伊藤 文 氏は「やりました」とガッツポーズ。喜びが弾ける。いよいよグランプリ。どこが呼ばれるのか、コンテスト参加

者は固唾をのむ。「グランプリは介護付き旅行事業の『旅のお手伝い楽楽』です」。この瞬間、会場の興奮は最高潮に達した。

佐野 恵一 社長は「介護している祖母を旅に連れて行ったときの喜ぶ顔を見て起業にチャレンジした」という。グランプリ受賞はビジネスで大きな自信になる。「色々なプランを作り、一人でも多くの人に旅を楽しんでもらいたい」と事業拡大に夢を膨らませる。



準グランプリ グローイングジャパン㈱ 伊藤 文 氏



㈱旅のお手伝い楽楽 佐野 恵一 氏

若いベンチャーがこの2日間で得た貴重な経験と苦労は、今後のビジネス活動で間違いなく役立つだろう。こうしたベンチャーが日本の経済を活性化させ、世界に羽ばたいていくことを期待したい。

分科会②

地域発ベンチャー 「地域発! 全国・世界」

「地方の時代」と言われ続けながら、現実、地方経済は疲弊してきた。だが地域の個性、特性を活かした事業を生み出すことで成功しているベンチャーも多い。分科会2ではそうしたベンチャーの代表が世界への発信を見据えて議論した。

モデレータ

ジャーナリスト・キャスター、信州大学経営大学院 客員准教授 三神 万里子 氏

パネリスト



「生産から消費までのブランディング構築を」

㈱沖縄ティファクトリー 沖縄県 代表取締役社長 内田 智子 氏

スリランカで紅茶に魅せられて以来、専門性の高い仕事をしてきた。子育ての場として選んだ沖縄でスリランカと同じ赤土をパイナップル畑で目にし、国内では沖縄が良質の紅茶を作れるティーベルトゾーンに位置することに気付いたのが事業のきっかけ。紅茶市場の中で“国産高級紅茶”

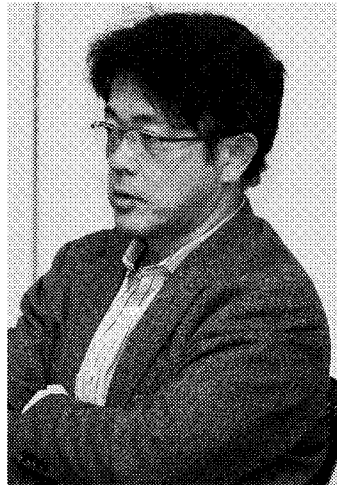
が存在しないことから、そのポイントを目指し、1次産業から3次産業までの一貫した流れ作りに努めている。ブランドは顧客との約束を守ること。常に喜ばれる姿勢と市場でのポジショニングにより全ての選択が変わる。消費されるまでのブランディングに注意を払っている。

「ベンチャーは安易に支援を求めない気概を」

㈱つくばウェルネスリサーチ 茨城県 代表取締役社長 筑波大学大学院 人間総合科学研究科 准教授 久野 諒也 氏

医療費が増大する中で、日本全国を元気にしたいという思いから、筑波大学教員と二足のわらじを履いている。生活習慣病を予防するため、ITを駆使した健康プログラムを作り、医療費削減を実証。自治体と連携して今は数十万人のサービス利用者のデータを持つ。

健康な社会をつくるという研究目標の達成の手段としてビジネスを推進しているため、儲からないからやめるという選択肢を持たないことが強みかも。ベンチャーは安易に支援を求めない気概が必要で、支援側にはうまく支えてほしい。



「可能性を信じ走ることでパワーが出てくる」

㈱トラベル東北 西形県 代表取締役 山口 スティーブ 氏

スタンフォード大学院卒業後、三菱商事に入社。山形県の土建業の娘に惚れて結婚、帰化した。

時代の終わりを感じて土建業を止めた後、知り合いから旅行会社を買ったが、大手の看板で仕事をしていたので独自企画にOKが出ない。自分で二重免許を取り、「山形

県のチベット」といわれる最上町の美しい資源、人間、食べ物などが体験と結びつく企画をつくり始めた。

ただ安全、安心を求めている人間のパワーは出ない。自分の可能性を信じて走っている中で、潜在パワーが出てくる。それが楽しくて仕方がない。



分科会③

転業／第二創業 「変化をCatch UP! 新事業展開のブレイクスルー」

仕事を辞め自ら事業を興したり、先代から続いた仕事の中身を変える「第2創業」には大変な決断とエネルギーが必要になる。情熱に満ちたチャレンジ精神がなければ不可能だろう。分科会3では「決断の勘所」を熱っぽく話した。

モデレータ

プライスウォーターハウスクーパース㈱ ディレクター 原 誠 氏

パネリスト

「第二創業、製造商品分野をがらりと変えた」

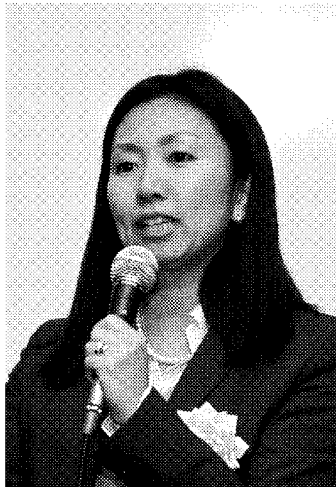
日本電鍍工業㈱ 埼玉県 代表取締役 伊藤 麻美 氏

創業者の父が20年前に急逝し状況が一変した。後を任せた人の放漫経営で会社は危機に直面した。私は経営の全くの素人だったが「父の会社を残したい」「社員を守らねば」との思いだけで跡を継いだ。

インターネットで営業していると、医療関係のメーカーから依頼を

受け、「できない」という社員に「やれる」と納得させた。現在の仕事は管楽器や精密部品、医療器具、アクセサリーなどがらりと変わった。

今後も企業規模の拡大ではなく事業の継続と雇用維持、そして従業員の夢を叶えられる様、重点を置いてやっていきたい。

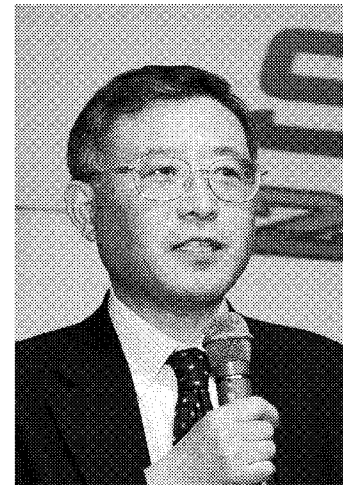


「“刷り合わせ”技術力で世界に発信」

エナックス㈱ 東京都 代表取締役 工学博士 小沢 和典 氏

ソニーを飛び出して15年。会社は立ち上げたが、当初はやることもなくコンサルタントなどをしていた。あるとき知り合いから「豪州のソーラーカーレースに出る高校生を助けてくれ」といわれ、これがきっかけでリチウムイオン電池が第二創業になった。さらに第三創業の時期を経

て、現在第四創業（量産化）として上海に本格的な大工場も作る。リチウム電池は擦り合わせ技術で、量産化できているのは日本、韓国、中国しかない。我々の技術を世界に向けて発信し、国力をあげていきたいという思いで進めている。



「何か新しいことをやりたいと58歳で起業」

㈱悠心 新潟県

代表取締役社長 二瀬 克規 氏

マーケティングと基礎研究を結びつけた商品開発を行い、ファブレスで生産している。アイデアに「人・モノ・カネ」が集まるという考え方。開発した商品には簡単に液体小袋包装を開封できる充填機や、開封後も密封状態を保つことで腐敗を軽減する容器などがある。前職は一部上場企業の常務でR&

Dの責任者をしてしたが、何か新しいことをやりたいと58歳で起業した。開発というのは「想像の産物」だ。目標値を100点ではなく300点ぐらい高くおかないと、世の中をびっくりさせる商品は作れない。ベンチャーで一番大事なことは「弱い部分をどうやって強くてできるか」だ。

